

アンケートによる福岡県のイノシシの生息状況について

福岡県林業試験場 池田 浩一

1. はじめに

福岡県におけるイノシシの生息状況については、昭和53年に環境庁の委託により福岡県が実施した動物分布調査報告書(哺乳類)がある。しかし、近年当時の分布域外からの生息確認の情報が相次いで寄せられ、分布域がかなり拡大していることが予想された。そこで、イノシシの生息、捕獲状況に関するアンケート調査を実施した。さらに、これらの結果を基に、イノシシの分布と植生との関係について検討を行った。

2. アンケートの実施年度及び調査方法

アンケートは、昭和59年度及び60年度に実施した。

アンケートの内容は、イノシシの生息状況として、生息の有無、仔連れの有無、見かけるようになった年代及び見かけなくなった年代、捕獲(銃器及びわなによる)状況として、捕獲場所、捕獲日、性、体重である。捕獲状況については両年度ともアンケート調査を実施したが、生息状況については59年度のみ実施した。

回答依頼先は各年度とも狩猟者で、狩猟者登録証交付時に県農林事務所を通じてアンケート用紙を配付し、登録証返納時に回収した。配布数及び回収率は59年度が6,425通(41.7%)、60年度が5,656通(26.5%)であった。得られた情報は常田¹⁾の方法に従い、5万分の1地形図を16等分した区画に整理した。この際、「…町全域」とか「…山地一帯」などと広い地域を示した情報は除いた。捕獲個体については猟期のみ集計し、捕獲状況から重複個体の除去を行った。

植生に関する分析には、環境庁昭和57年及び60年発行の現存植生図(縮尺は5万分の1)を利用した。図幅名「久留米」は未発行のため、福岡県林業試験場猪上信義氏の資料を利用した。これらの現存植生図は植物社会学に基づき細かく区分されているため、次のように再編し、各区画における占有率を鳥居²⁾の方法に従い、占有率0%をランク0、1~20%をランク1、21~40%をランク2、41~60%をランク3、61~80%をランク4、81~100%をランク5とランク付けした。

a) 広葉樹二次林(ブナクラス及びヤブツバキクラス域代償植生で、アカシデーイヌシデ群落、アカマツ群落、シイ・カシ萌芽林、コナラ群落など)

b) 針葉樹人工林(スギ、ヒノキ、クロマツ植林)

c) 耕作地(果樹園、茶畑、畑地、水田など)

d) 市街地(工場地帯、造成地などを含む)

なお、「自然植生」や「広葉樹人工林」などもあるが、いずれも面積が少ないため、ここでは検討の対象からはずした。また、離島を除く本県全域は247個の区画に分けられるが、植生の解析には県境や沿岸地をかすかに含む38区画を除いた209区画を対象とした。

3. 結果

生息状況については、離島を除く県全域区画247区画中142区画(57.5%)から生息が伝えられた(図-1)。このうち仔連れを見た区画は98区画で、仔連れを見かけない区画は見た区画域の周辺部が多かった。

年代別に見ると、昭和20年代からが最も古く、八女郡の山間部、宝珠山、求善提山や福智山周辺など22区画であった(図-2)。その後、30年代に28区画、40年代に42区画、50年代に42区画から新たに生息が伝えられ、特に、40年代の北九州市周辺、50年代の福岡市周辺での増加が著しかった。一方、見かけなくなったという区画は伝えられなかった。

次に、捕獲状況について見ると、今回得られた捕獲数は59年度が399頭、60年度が465頭で、狩猟統計の捕獲数に占める割合は、各々41.9%、39.5%であった。性の内訳は、59年度が雄59.1%、雌40.9%、60年度が雄60.1%、雌39.9%で、雄:雌の性比は両年度ともほぼ6:4であった。体重に関する情報は、内臓込みの体重と内臓除去後の体重が混じていたため、検討しなかった。

図-3は60年度の捕獲数を示した。北九州市の山間部や古処山周辺で多くなっている。59年度も数の多少はあれ、ほぼ同様な傾向を示した。

以上の分布と60年度の捕獲数を基に、各植生ごとの生息率(各ランクの全区画数に占める生息している区画数の百分率)と捕獲数(各ランク内の総捕獲数を各

Koichi IKEDA (Fukuoka Pref. Forest Exp. Stn., Kurogi, Fukuoka 834-12)

Occurrence of the Japanese wild boar (*Sus scrofa leucomystax*) in Fukuoka Prefecture

ランクの生息している区画数で割った数値)を求め、植生との関係を検討した(図-4)。

イノシシの生息に正の要因となっているのは針葉樹人工林で、ランク5では生息率は100%に達し、捕獲数も増加する。逆に、市街地では生息率、捕獲数とも減少し、生息に負の要因となっている。

耕作地ではランク1で高かった生息率、捕獲数は、ランク2以上で減少する。しかし、捕獲数はランク5で増加するが、1区画だけの数字であり、耕作地も負の要因となっている。

広葉樹二次林では、生息率はランク1~3では高いが、ランク4では減少し、生息環境としての位置づけがはっきりしない。捕獲数はランク2までは増加するが、ランク3以降減少し、他の植生に比べて捕獲されにくいことを示している。

4. 考察

千葉³⁾は以前県内各地で見られたイノシシが昭和33年当時は絶滅したと報告し、その原因を銃器の進歩による狩猟圧の増大としている。その後銃器はさらに進歩し、道路網の整備によって狩猟者は機動力を得るなど狩猟圧はさらに増大していくにもかかわらず、昭和40年代以降イノシシの分布域は急激に拡大し(図-2)、イノシシの分布変動を狩猟圧だけでは説明しにくい。植生と分布の関係では、針葉樹人工林が増えるほど生息率が上昇した(図-4)。朝日⁴⁾は、針葉樹極相林

やスギ密植地は食糧とする下生えを欠くことからイノシシの生息不適地としている。一方、鳥居²⁾は静岡県でも人工林で高い生息率を示し、それは1区画(今回と同一区画)の中に様々な林相や地形を含むことが一因ではないかと推察している。確かに林分の成長にともない餌量も変化することが考えられ、餌供給源としての人工林の位置づけを今後明確にする必要がある。今回見かけなくなったという情報は得られなかったが、個体数の減少地域や増加地域、拡大していった径路などより詳細な調査を行い、今後のイノシシの分布変動を予測するために拡大の原因説明を行う必要があろう。

ところで、両年度とも雄の方が多く捕獲された。イノシシは一般に雄の方が行動域が広いことが知られている。また、図-1の仔連れを見ない区画を雄の出現区画と仮定すれば、雄の方がより里山まで出現していることになり、雄が狩猟される機会の多いことが、雄の性比を高めたのではないかと考えられる。

引用文献

- (1) 常田邦彦・丸山直樹・古林賢恒・赤坂猛・宮木雅美：生物科学, 28(3), 120~132, 1976
- (2) 鳥居春巳：静岡林試研究調査資料 21, 1~46, 1978
- (3) 千葉徳爾：地理学評論 32(9), 468~480, 1959
- (4) 朝日 稔：追われる「けもの」たち(四手井綱英・川村俊蔵編著), pp.94~113, 築地書館, 東京, 1976

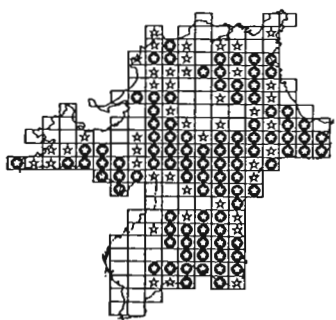


図-1 イノシシの分布及び仔連れの有無

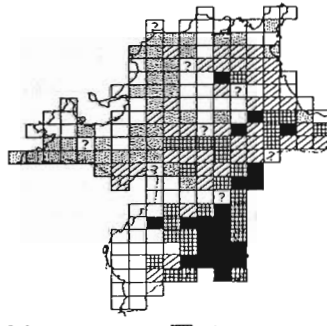


図-2 イノシシの見たれ始めた年代

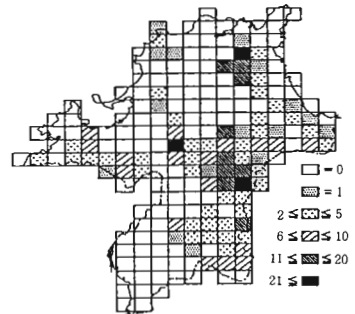


図-3 イノシシの捕獲数 -昭和60年度猟期-

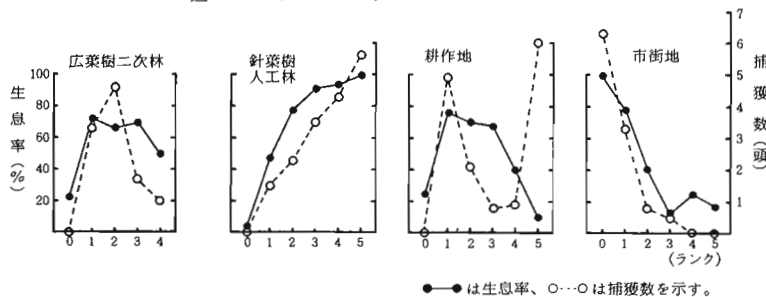


図-4 環境別に見たイノシシの生息率と捕獲数